

資料紹介

続 経済学者の追悼文集

杉 原 四 郎

は し が き

本誌第41巻第6号(1992年3月)に「経済学者の追悼文集拾遺」を書いて以後に入手した経済学者の追悼文集を紹介する。非売品のものは、おおむね御遺族または編者からおくりられたものである。

追悼文集(単行本)8点は経済学者の姓名の五十音順にならべてある(ⅠとⅡ)。Ⅲはシリーズで出版される書物の一冊または雑誌の特集号のかたちで追悼文を取録したものを6篇やはり五十音順で紹介した¹⁾。これらの経済学者には(河上をのぞき)単行本のかたちでの追悼文集は刊行されていないようである。

本稿でとりあげた13名の経済学者は、30歳代で早世した人もあれば80歳をこえる長命の人もあり、大学人もあれば事業家や官庁エコノミストもいる。大学の教授でありながら国際的な諸分野でも活躍した人もあれば、民間の研究所で地味な研究生活を送った人もいる。経済学とのかかわりも彼等の思想や経歴によってさまざまである。しかし、経済生活の向上をねがい、そのための道を求めて経済の観察と分析に心がけたという点では共通している。

またここで紹介した追悼文集は、歿後半年後に出たものもあれば、歿後100年にしてようやくあらわれたものもある。A5版で700ページにちかい大冊もあれば、数十ページの雑誌の一部を割いて掲載されたものもある。だがいずれも、故人に寄せる友人や遺族の熱い思いが結実したものである点では共通している。

なお私が収蒐した追悼文集が原則としてすべて関西大学経商資料室に寄贈されること

-
- 1) 以前私は、雑誌の特輯号のかたちでの経済学者の追悼文集を、大内兵衛、中山伊知郎、高橋誠一郎について紹介したことがある。杉原「雑誌特輯号に見る経済学者の追悼文集」,(杉原『日本の経済雑誌』,日本経済評論社,1987年所収)参照。前稿でも矢口孝次郎と久留間敏造の追悼号雑誌を紹介した。

は、従来の通りである。

I

(1) 加藤敬三(1899—1931)

『加藤敬三遺稿集』編輯兼発行者 故加藤敬三君追弔基金委員会(一橋如水会内)、1932年11月発行、非売品、A5版260ページ、遺影數葉。「序にかへて」(編纂者識)によれば、故人は岐阜県可児郡御嵩町の出身、県立の中学を卒業後東京高商予科に入学、在学中は社会思想の会や労働学校の設立に関係し、1925年商学士として卒業した。東京朝日新聞に入り社会記者として活躍したが病に倒れ、1931年5月歿した。

本書は前半遺稿集、後半追悼文集の二部にわかれる。遺稿集は、研究(「資本主義社会におけるギルド」)、論攷(「英国炭坑争議」,「無産新聞の事など」)、新聞によりて(「S.P.Sより」,「八丈島行幸記」など7篇)からなり、後半の追悼文集「ありし日」はつぎの八篇からなる。「加藤敬三君を憶ふ」上田貞次郎,「勉強家の小学生」細野久雄,「加藤君の中学時代の思い出」須田太郎,「逝ける加藤敬三」川村豊郎,「敬三君の思い出」鈴木文四郎,「敬三君を憶ふ」尾阪與市,「ある追憶」矢島八洲夫,「敷島を嘯む」安井俊雄。

「編輯者跋」で山中篤太郎はつぎのように書いている。遺稿集の研究は一橋の卒業論文であり、論攷の二篇は、恩師上田貞次郎が出していた『企業と社会』に木曾次郎の筆名で発表されたもの。追悼文集のうち、細野、須田の二人は故人の故郷の友人である。「故人との交遊の最も深かったことの故を以て不肖編集の責を負わしめられた……編纂開始昭和六年夏、印刷開始七年七月、今近く渡欧の日を前にして僅かに本書の成らんとす…(1932.10.14)」。

(2) 小林一三(1873—1957)

『小林一三翁の追想』編集・発行者小林一三翁追想録編集委員会佐藤博夫(大阪市北区京阪神急行電鉄株式会社内)、発行日1971年9月15日、非売品、A5版、687ページ、巻頭に小磯良平筆の肖像画など写真52葉、装禎小磯良平。

佐藤博夫の序に「ここに一本を上梓する所以のものは、一には翁を追慕し……二つには……懐しいあの叱咤の声を諸賢の思い出の中に再び聞かぬがため」とある。追悼文の順序は、知己・交友関係、阪急、東電、東宝、芸能、茶道の各関係者、そして最後に遺族による思い出(以上の区分の中では年長者順)の順序におさめた。最後に年譜(657—686ページ)。

学界からは小林の慶応での後輩高橋誠一郎と小泉信三が執筆している。高橋は、小林の

国民劇創成の構想には、彼が慶応の学生だった頃、「三田の外塾を抜け出して、赤羽の工場裏を通り越し、幟のはためく麻布十番辺の小芝居に親しまれた経験が多く役立ったことであろう」と書き、小泉は小林が商工大臣のとき「官僚の抵抗を持てあまして嘆声を洩らしていたのを慶応の出身者が勇気づける晩餐会をひらいた時、その席で池田成彬が、小林を大臣にした近衛首相が小林に対して後援してないという声に対し、「全くその通りなんです、それがその通り行かないのです」といったことを書いている。間もなく小林は辞任し、雑誌に「大臣落第記」を書いて物議をまねいた。ちなみに小林の商工大臣辞職のいきさつは木舎幾三郎（政界往来社社長）が『「大臣落第記」前後』に書いている。

経済評論家としては石山賢吉、小汀利得、三宅晴輝が書いている。まず石山は、小林の事業家としての信条は、「利益を社会に返せ」ということであり、「理想と実現の調和」ということであったと述べ、その信条にもとづく経営の成功例をいくつかあげている。小汀は、小林が東電における人事制度の大刷新、大学卒は官立であれ私立であれ、すべて平等に遇し、実力、能力に従って役職を与えるという刷新を敢行したことと、美術や茶道に傾倒しながら、かりそめにも道楽に淫せず先づ事業の成功を第一にしたところが小林の偉大なところだと述べている。三宅晴輝は、小林に「君の好きな人を集めて来い」といわれて自由主義者やゴルフ友達——芦田均、清沢冽、笠間昶雄、鈴木文史朗ら——もしまいには憲兵隊にいらまれてやめてしまったが、反ファシヨ論や非戦論がさかんなこの会を小林はやめるともメンバーをかえろとも言わなかったので「それで平気でそのまま続行していたのだ」と書いている。

大阪の財界人で全集が出ているのは、おそらく武藤山治（全集、1～8、増補、新樹社、1963—66）——武藤の追悼文集『武藤山治氏追悼録』（1934年）は本誌第40巻第3号（1990年9月）で紹介した——と小林一三（全集1～7、ダイヤモンド社、1961—62）ぐらいであろう。小林には『逸翁自叙伝』（産業経済新聞社、1953）や三宅晴輝の『小林一三伝』（東洋書館、1954）もある。本書はこうした文献を補って、故人の思想と行動を理解するよすがとして役立つであろう²⁾。

(3) 下村 浩 (1910—1989)

『下村浩』編集下村浩博士追悼集編集委員会（小金井市桜町1—2—43）、発行1991年

2) 小林一三とほぼ同じ頃に入閣した関西の財界人に平生鈺三郎がある。平生については『平生鈺三郎追憶記』（津島純平編、拾芳会、1950年7月、非売品）がある。本書については前稿（本誌41巻6号）でとりあげたが、杉原「平生鈺三郎と彼をめぐる人々」（『平生鈺三郎の人と思想』、甲南大学総合研究所叢書27、1993年所収）をも参照。

6月、非売品、A5版322ページ、巻頭に遺影40葉、題字は故人の直筆。

編纂委員会の「はじめに」に、故人の三周忌に「先生を哀惜する方々のご寄稿を得て、追悼集『下村浩』を上梓する」とある。同委員会の「あとがき」に、故人の逝去直後に、その追悼記事が『ファイナンス』（大蔵省）や『行友』（日本開発銀行）などに出たが、「下村学校」の門下生や遺族の意向により追悼集刊行の事が決まり、円谷秀男、橋山礼治郎、東淳、堀内行蔵、神谷克己と故人の長男下村恭民の6人が中心となり企画を進め、池田満枝、大来佐武郎、篠原三代平、宮沢喜一ら16人の発起人を得て、交友から75篇、遺族から3篇の寄稿に、写真・年譜・著作目録をそえて「ここに『下村浩』を上梓の運びとなりました」とある。

冒頭に1989年7月3日の葬儀の時に読まれた弔辞（日本開発銀行総裁高橋元、宮沢喜一、原純夫、石黒隆司）があり、飯田経夫から渡辺武までの友人71人の文章が、姓名の五十音順にならび、その後下村修代（未亡人）、恭民（長男）、純央（次男）の三篇がくる。次に年譜と著作目録と「下村浩博士の業績」（日本開発銀行設備投資研究所——故人は晩年その所長・特別顧問であった——）（313—320ページ）がおかれている。

下村は東大経済学部卒業後大蔵省に入り、1936年から翌年にかけてニューヨークに駐在、そこで刊行直後のケインズ『一般理論』に会う。下宿の近くのコロンビア大学には一度もゆかず、ケインズを熟読した。1948年から数年間下村は結核の長期療養に専念するが、その間に彼は背文字がすり減って判読できぬぐらいになったケインズの初版本をくりかえし読みながら、自分の構想をまとめるためにノートをとりはじめ、それが彼の学位論文——これは東北大学に提出され、安井琢磨が主査として審査にあたった。この事情は、同じ時に学位を得た宇沢弘文がのべている、43—44ページ参照——となった「経済変動の乗数分析」（『大蔵省調査月報』、1951年3月、5月、7月、1952年同名のタイトルで東洋経済新報社より出版）に結実する。この間の事情は未亡人や長男の文章にくわしい。

健康を回復した下村は、1955年前後からエコノミストとしてのめざましい活動を開始する（1954—55年の「金融引締め政策」をめぐる論争）。その後1956—57年の「在庫論争」、1960—61年の「成長論争」などを経て、下村の二番目の著書『経済成長実現のために』（1958年、宏池会）が出、彼は池田内閣のブレインとして脚光を浴びることになる。この時代の下村については多くの寄稿者によって論じられているが、篠原三代平の文章は「在庫論争と輸入依存度」、「在庫論争の延長上の成長論争」の二項目で、自説と比較しながらくわしくのべている（126—131ページ）。

これらの論者の多くは、下村が石油ショックを機にゼロ成長論に転換したことにもふれ

ている。香西泰は「下村さんの謎」の中で下村がいくつかの謎をのこした、「スフィンクスのようなところがあった」といい、つぎのようにのべている。「最大の謎は、高度成長論からゼロ成長論への一転である。石油・供給制約という強力一点主義の理由づけがなされているが、それだけだったろうか。石油供給が制約されれば価格が上昇し、代替節約が進む。このマイクロ経済学の第一課をあっさり無視されたのはどういうわけだろうか」（101ページ）。下村の変身を擁護する人々の中で、金森久雄も「高度成長を支えた下村理論」の中の、「ゼロ成長論で一步も引かず」の項で、「私はこの時期の下村氏の議論には反対であった。エレクトロニクスを中心とする力強い技術革新や、エネルギー節約の努力による石油危機の克服という点を全く無視していた」とのべている。

前掲の文章の中で香西泰は、「後世、日本の経済史、経済政策史、あるいは経済思想史を研究する者にとって、下村浩さんはいつまでも興味につきない研究対象として残るに違いない。下村学のあらゆる側面を、同時代の方々には是非記録しておいてもらいたい」（p. 100）と書いているが、この『下村浩』は、その意味での貴重な記録として、今後長く参照されることだろう。

(4) 住谷悦治（1895—1987）

『回想の住谷悦治』、編集兼発行者住谷一彦・住谷馨、発行日1993年7月1日、非売品、A5版461ページ、巻頭に遺影、スケッチ、ノートなどの写真33葉。年譜や著作目録は含まれていない。

「まえがき」（住谷一彦）によれば、父が1987年10月4日に「亡くなったとき、父を追悼する小冊子を作る」話があったが遅延を重ね、五年後の今日「やっとここに一冊の、それも大冊の本となった」ことに望外の喜びを味わっていること、「このような立派な本にして下さった法律文化社」に深謝するとある。「あとがき」（住谷馨）によれば、「一番編集に困ったことは最初のスケッチで、父が編集した大きな6冊の画集から少数を選び出すのは難事業だったこと、また「母も若い時代は絵が上手く、父の手で保存されている」とある。「まえがき」にも父は妻よし江に先立たれてからは、「めっきりと心身に衰えみられるようになった」とある。夫人のことは、木場得定「思い浮かぶままに——住谷さんのこと、併せてその御家族とのことなども」、住谷磐根「悦治兄の思い出」や、高村さくら「天国にいられる住谷悦治先生へ」や村田数之亮「住谷さんと私たち」などの中に書かれている。

追悼文は、1. 同志社大学関係（具島兼三郎ら17人）、2. 松山高商関係（木場得定ら14人）、3. 学会関係（船山信一ら7人）、4. 同志社大学ゼミナール関係（大江直吉ら19人）、

5. 知人（村田数之亮ら6人）、6. 親族関係（小林綾ら8人）の六篇に編まれている。1～5のうち、外国人はヨーゼフ・クラナー1人、また女性は4.の高村さくら、5.の寿岳章子、藤木テルエ、半田真樹子の4人である。

本書は、キリスト者として、マルクス主義者として大正・昭和の激動期を戦後にいたるまで活躍し、学界・教育界・言論界に大きな足跡をのこした故人の面影を多彩にえがいた文集で、将来、書かれるであろう故人の伝記や、中学以来書きのこされている日記（その公刊も期待される）を補足する貴重な記録となるであろう。故人の人間性、それを支える根本思想をのべた示唆に富む諸家の文章の中から、同志社の経済学部で一時期同僚であった逆井孝仁の感想を紹介しよう。

逆井はこの時期に故人からよく絵——身近の自然描写——をもらったが、その作品から「自然の前に素直かつ謙虚に自己を表出するものの心やさしさにあたたかさを感じる」とのべ、つづいてこのように書いている。

「私はそこに先生のマルクス学者あるいはキリスト者としての目よりも、むしろ東洋的な天人合一を志向する文人的・国土的な心境と風貌をみてしまいたくなる。先生には案外にそうした資質が体内深く沈澱していたのではないだろうか。先生の河上肇への共感・私淑の一因が、そこにもあるような気がしてならない」。

船山信一による「哲学科学の会」と故人との関係、竹中正夫による「C・S研究会」と故人との関係、また藤谷俊雄による「京都愛書会」と故人との関係についての敘述は、私にとって大変有益であった。私は『住谷文庫目録』を通じて先生を偲ぶ」を寄せている。『住谷文庫目録』（1990年）は、住谷家から群馬県立図書館に寄贈された12,820点の図書資料の冊子目録である。私は先生と経済学史学会を通じて知り合い、河上肇記念会を通じて一層親しくさせていただいたので、この目録も一彦・馨両氏から贈られたものである。先生が生涯を通じていかに広くまた深く図書の蒐集につとめられたか、そして先生の学問の特質が何であったかを、この目録はよくあらわしていると思われる。

II

(5) 土屋保男（1915—1991）

『マルクスとともに——土屋保男遺文集——』、1993年1月刊、編集・発行 土屋保男遺文集刊行会（東京都文京区駒込3-9-17、土屋浪江方）、A6版275ページ、非売品、巻頭に遺影17葉。

土屋保男遺文集刊行会（呼びかけ人岡本博之他7名）の序によれば、土屋の三回忌がお

とれずにあたり、故人の残した論文・エッセーを整理して公刊することが友人・教え子の間で決まり、その趣旨に賛同した人々の有形無形の援助を得て本書が生まれた、とある。

序と巻末のお礼の言葉（土屋浪江）の他に、本文はⅠマルクスとともに、Ⅱ翻訳論・経済学方法論、Ⅲ学生諸君への想い、Ⅳ初期哲学論文、Ⅴ追想、Ⅵ著作目録・略年譜の6部より成る。つまりⅠ～Ⅵが故人の遺文集、Ⅴが友人・教え子の追想文集、Ⅵが目録・年譜で、ここではⅤを紹介する。つぎの11人が寄稿している。

土屋保男さんと『資本論』岡本博之（日本共産党名誉幹部会委員）、土屋保男君への追悼文私記 宇佐美誠次郎（法政大学名誉教授）、土屋君との初会と再会とそれから、杉本俊朗（横浜国立大学名誉教授）、土屋保男君のこと 片山 山川力（著述家・新聞論・少数民族論、山形高校・東京大以来の友人）、仕事と酒と 常井直正（貸本店経営、山形中学以来の友人）、土屋先生のおもかげ 西本昭治（ロシア文学翻訳家）、土屋さんと私 北田芳治（東京経済大学教授）、土屋さんを偲ぶ 栗原茂（日本共産党中央委員）、先生との20年 平石敬（文京区日本共産党後援会事務局長）、弔辞 宇野三郎（日本共産党中央委員会附属社会科学研究所長）、土屋保男先生への感謝とお別れの ことば（弔辞） 菅野正夫（法政大学土屋ゼミナール一回生）。

私は土屋の著書『革命家、マルクス』、『フリードリヒ・エンゲルス』、『マルクス・エンゲルスの青春時代』、『マルクスへの旅』（以上新日本出版社）の読者であり、文通もあったが面識はなかった。私は土屋のエンゲルス研究に関心を持っていたので、ゲムコー編土屋保男・松本洋子訳『フリードリヒ・エンゲルス 伝記』（大月書店、1972年）やエンゲルス、土屋保男訳『家族・私有財産・国家の起源』（新日本文庫、1990年）も読んだ。だが土屋が最も力を入れたのは、1979年以来、新訳『資本論』の集団翻訳作業に数十名の経済学者と共に参加したことで、土屋は法政大学の教職も辞してそれに全力を傾注した。その様子を岡本博之や宇佐美誠次郎は追憶文の中でのべている。この新訳は全13冊が刊行され（新日本出版社、1982—89年）、総索引の刊行をのこすのみであるが、土屋自身この新訳の特徴について、「あとはじっくり挑戦——新訳完結した『資本論』——」や「独自カテゴリーを展開——『資本論』新訳への質問にこたえて——」（いずれも本書に収録）で語っている。

(6) 渡植彦太郎（1899—1992）

『渡植彦太郎先生追悼』発行渡植彦太郎先生追悼文集発行委員会（松山市権現町甲414）、発行日1993年4月9日、非売品、A5版97ページ、題字富田九鳴、巻頭に遺影および掛軸

（「労働即創造」）の写真。

内山節「序にかえて、渡植彦太郎氏の業績」（1992年5月28日の『愛媛新聞』所載）、中山保男編「略年譜・著書論文等目録抄」について、追悼文集が(1)在朝鮮時代（5人）、(2)横浜市立横浜商業専門学校時代（5人）、(3)甲南高校時代（1人）、福井大学時代（7人）、(4)富山大学時代（4人）、(5)神奈川大学時代（5人）、(6)今治明德短期大学時代（2人）、(7)松山商大時代（5人）、(8)友人（4人）、(9)親族（4人）の九篇にわけて収録、最後に跋（木水育男・中山保男）がある。

故人は東京・日本橋の出身、東京商大で左右用喜一郎に学び、朝鮮で十数枚年教職についた後1941年横浜市立商業専門学校に就職、後甲南高校に転じた。戦後は福井大学・富山大学・神奈川大学などを歴任、最後は松山商大に定年まで在職した。主要著作は『経済価値の社会学』（1972年）、『使用価値の社会学』（1983年）と晩年 農山漁村文化協会から出した三部作『仕事が暮らしをこわす』、『技術が労働をこわす』、『学問が民衆知をこわす』（1986—87年）、最後の著書『経済合理主義と生活文化』（1991年）などである。

渡植が晩年その仕事に注目し親近感をいただいていた内山節が「序にかえて」の中で渡植の学問についてつぎのようにのべている。「氏にとっては、過去の学問は学ぶ対象であり、同時に批判の対象であった。マルクスもカントも、デュルケムもウェーバーもデュウイも例外ではなかった。そして日本文化に対する深い造詣が、その理論を豊かなものにしていった。ここに哲学者であり、経済学者、社会学者である巨人、渡植彦太郎氏が誕生した。同氏が残された数多くの著作は、学問史の宝として残りつづけるであろう」。

馬場宏治は「卒寿の学者の『資本論』（『学士会報』1992年第794号、本書に一部収録）において、渡植の『経済合理主義と生活文化』には、「著者の選暦後30年におよぶ『資本論』研究の深化が現れている」と書き、彼が渡植と神奈川大学で同僚になった時、渡植から『資本論』の読み方をきかれ、何はともあれ全巻を通読することだと答えたこと、夏休みを一つ越えてから渡植にともかく読み終えたので御礼に一餐さしあげたいといわれ、その序で『資本論』のドイツ語版と英訳と邦訳とを机上にならべ、それらを適当に読みついでとうとう読み上げたといわれ、語学力の高さに敬服したことをのべ、最後に「ただこれが、内山節氏のいう『学問の遊び人』渡植彦太郎流の一端だということには気付かなかった」とのべている。

私は友人に紹介されて渡植に関西大学で会い、J. S. ミルの話をして以来、著作を交換し合う関係になった。その頃から私は彼の親友大熊信行とも著作を交換しはじめていたのだが、同じ頃一橋に学んで異色の経済学者の道をあゆんだこの二人の先学——哲学から文

学にいたる広い教養を身につけ、外国文献から精力的な摂取をつづけつつ独自の思索と観察にもとづく著作を生み出してきたことで共通な学風をもつ——から多くを学んできたのだった。渡植は亡くなる4年前の1988年2月28日、大熊門下の人々に対し、松山で、大熊の思い出を語っている（渡植「西洋経済学の真似を打ち破った先駆者」、『大熊信行研究』第9号、1993年、2月28日、3—6ページ）。この聞き書きは、大熊評としても鋭いが、大熊を通じて自分自身を語っているところがあって、渡植の思想と人間がよく出ている。

(7) 那須 皓（1888—1984）

『那須皓先生——遺文と追想』、編者那須皓先生追想集編集委員会、発行責任者 井上勝英、発行所財団法人農村更生協会、発売所不二出版株式会社、発行は1985年3月29日。頒布価格4,500円、A5版518ページ、巻頭に遺影と筆蹟の写真2葉。

編集委員（渡辺庸一郎、井上勝英ら8名）の一人神谷慶治が書いている「後記」によれば、故人の一周忌に刊行された「本書の編集にあたりましては、京都の渡辺庸一郎先生、九州の岩片磯雄、大橋育英の両氏は遠方より御援助賜りました。特に在京の斎藤誠、川野重伍、渡辺兵力の諸氏には数回お集まりいただき、編集企画、内容の整理等多大のよきアドバイスと御協力をいただきました。ことに井上勝英氏はこの1カ年間連続投球のありさまでありました」。

I 遺文とII追想の二部にわかれる。Iには「人を想い旅を想う」と題する短歌と長詩、「農政への直言」と題する6篇（「農政への直言」、「農地制度改革の後に来るもの」、「英国自由党の農地国有案」、「日本農業を見直す会」発会の提言、「那須先生の話聞く会」における口述記録、経済更生運動の指導原理）、「日本再建への至情」と題する石黒忠篤氏あての那須皓書翰の三篇をおさめる。IIは、(イ)渡辺庸一郎「那須皓先生——その人と学問」はじめ故人の研究者としての歩みを回想した7篇をおさめた「足跡を想う」、(ロ)松本重治「那須皓先生を偲ぶ」はじめ故人の国の内外における多様な諸活動を紹介した17篇をおさめた「多彩な活動を偲んで」、(ハ)磯辺秀俊「思い出」はじめ那須門下生の書きつづる21篇をおさめた「警咳新たに」、(ニ)鞍田静子「先生、ありがとうございました」はじめ遺族や故人の身近にいた人々の手になる9篇をおさめた「身近に生きて」の4部よりなる。

那須皓には、『半生の回顧』（1951年）、『惜石舎雑録』（1982年）のような自伝があるが、遺文と回想よりなる本書は、95年に及ぶ故人の生涯をたどるうえに、自伝をいろいろの面で補う資料として有益である。1924年東大農学部農業経済学科創立や、翌1925年の農業経済学会創立やに尽力し、大正末期に公刊した『農村問題と社会理想』、『経済政策原理』、『公正なる小作料』（いずれも岩波書店）でわが国の農業経済学の実現に大きな影響をあた

え、その後、学界のリーダーとなった故人は、思想的には自由主義での立場であったが、戦時中南京政府の経済顧問であったことの故に公職追放となる。門下生の一人近藤康男は「那須皓教授を偲ぶ」で、那須が1923年駒場で外国留学後初の講義をしたが、この進歩的教授を学生は凱旋將軍のように迎えたと書いている。そして人間味にあふれた理想主義をもって終生農業問題にとりくんだ那須にとって、「善意に出発したことが予期の好結果を得られないこともあるのは世のならないである。満州農業移民はそれであったと私は思う」と書いている。那須皓の人口理論には過剰人口圧力という観念があり、それが満州移民を肯定する根拠となったと近藤はいい、そのことを『一農政学徒の回想』に書いたので先生の目にとまったと思うが、貞子夫人の米寿祝賀の席で先生に最後にお目にかかった節、『君の議論に教わるところがありました』とひとこと聞いて嬉しかった。この一言こそ私がながく欲しがっていた言葉であった」とのべている。満州移民と農業経済学者については拙稿「農業経済学者の自叙伝——橋本伝左衛門・東畑精一・近藤康男——」(杉原『経済学と経済学者』, 日本経済評論社, 1985年所収) 参照。

なお本書に東畑精一の文章は見られないが、東畑には「那須先生と外国」という師を語った一文がある(『明治・大正農政経済名著集』第21巻月報, 1954年8月, 農文協; 東畑精一『わが師・わが友・わが学問』, 柏書房, 1984年に収録)。この中で東畑は、「老春」の那須先生、語学に抜群の才、国際会議の危機を回避、「太平洋問題調査会」での国際会議、北京大学農学院の設立、超国家的な国際活動、文明問題としての国際問題、などの諸項目で、国際人那須皓の活動ぶりを語っている。

(8) 平館利雄(1905—1991)

『回想の平館利雄』, 編集発行者大崎平八郎(横浜市神奈川区三ツ沢下町16—27), 発行1993年8月10日, 非売品, B6版278ページ, 巻頭に遺影7葉。

編者の大崎平八郎が「刊行にあたって」と「編集後記」で本書刊行の経緯を語っている。刊行委員を作って組織的に追悼文集の作成にあたるのが種々の事情で困難なので、大崎(横浜高商・東京商大での故人の後輩でソ連経済研究者)が「個人の資格で編集・刊行の一切を担当」した。

本書は冒頭に「経歴」と最後に「著作一覧」をおいた他、I生涯と研究歴、II遺稿、III平館先生と横浜事件、IV平館利雄先生を偲ぶ(追悼文)の4部よりなる。大崎は「経歴」と「著作一覧」を書くとともにIの中に「平館利雄先生の生涯」を執筆している。これは故人が専修大学退職時に語った「私のソ連研究史の一齣」専修大学社会科学研究所月報』150, 1976, Iに再録)を補足するために書かれた。IIIは故人の生涯で最も重要な意味を

もつ横浜事件の「唯一の生存者である木村享氏（元中央公論社会）に事件について語ってもらったものである。そこには横浜事件のジュネーブの人権小委員会への提訴が、国内での再審請求と平行して今もつけられていることがのべられている。Ⅱには横浜事件のことを書いた短文二つや、「民族政策の二類型」（『改造』1942年7月）など7篇がおさめられている。

Ⅳにおさめられた追想文33篇は、遺族による2篇の他は、横浜高商や東京商大時代の友人や後輩、平館ゼミの出身者や、満鉄調査部、青森短大時代の友人などが書いている。それらには福島県白河の出身であった故人の温雅で飄々たる風貌がのべられる。渡辺利雄は「やさしさの気骨の人」について語り（202ページ）、斉藤秋男は「剛毅・温容の研究者を偲んで」（236ページ）書いている。平館は東京商大で大塚金之助のゼミに入ったが、大塚との関係については市川泰治郎、渡辺利雄、今井義夫、福島新吾らが書いている。大塚門下の川崎巳三郎、小橋広勝、越村信三郎、梅井義雄らはいずれも平館よりさきに他界した（巻頭の写真に、大塚とならんで越村、平館、縫田清二がうつっている1954年のものがある）。

平館は「私のソ連研究史の一節」で、彼が大塚か所長であった東京社会科学研究所に通って豊富なソヴェト文献で勉強したこと、『世界経済年報』の出版で大塚が刑務所に収容された後も孤軍奮闘したことを書いているが、元来彼がロシア語を学んだのは、「これからのソ連研究は英語やドイツ語の資料から間接に行ってはならず、直接ロシア語の原文に接すべきだ」という福田徳三の意見で東京商大に設置されたロシア語講座（国立大学での設置ははじめて）においてであったとのべている（26ページ）。

専修大学での同僚であった福島新吾は「謙虚な先覚者」の末尾で、つぎのようにのべている。故人と親しかった人々に共通する心境であろうか。

「先生は1991年4月に亡くなったから、ソ連のクーデタ事件もユーゴスラビアにおける内戦も知らずに逝かれたわけだ、それはかえって幸せだったかも知れない。先生の信条は1930年代という、資本主義の大破綻、社会主義の勃興の時代、その勝利を確信できた時代の影響によるものか、不動のものであった。後輩として深く尊敬の念を抱くが、次の世代の人間にはその心境を望みがたいとしつつある状況が、先生を偲ぶときさらに痛切に寂しさを増す」。

Ⅲ

(9) 河上 肇 (1879—1946)

『夜あけ』第1集、編集者河上会(京都市河原町通六角上ル)、発行者儀我壮一郎、発行所共同図書出版社、発行日1949年1月10日、定価40円。

河上肇の「甲申正月述懐」という詩や太田義一宛書簡(1945年10月9日づけ)が、また河上会の規約や入会のすすめや会員名簿などが掲載されているが、追悼文はつぎの9篇である(掲載順)。

名和統一「晩年の河上先生」、河上秀子「主人の思い出」(談)、内山完造「本と若者と読者」、小林輝次「先生の還暦」、椎名剛美「断片二三」、小柳津恒「手」、儀我壮一郎・松田弘三「河上先生とわれわれの時代」、堀江邑一「国際情勢を語る」、川上貫一「河上先生と民族の危機」。

名和は、『自叙伝』を出版社に送る草稿を書き取る作業をするために、河上にゼミ出身の山本広次を紹介したことを書いている。河上秀は、岩田義道のことを、主人が「ある誤解から岩田さんを遠ざけるようになり」、「岩田さんが度々訪ねて求められてどうしても会いません。……とうとう岩田さんもあきらめまして、一番最後に来られたときに、玄関で『先生はきっと思いちがいをしておられると思いますが、もうお目にかかりますまい。どうかよろしく』と涙を一ぱいためて帰られました。わたくしはほんとにお気の毒でなりませんでした」とのべている。

「あとがき」(署名は(G))にこの第一集を河上先生にささげること、「発足以来一年、われらの『河上会』も幅広く豊かな会に成長し」たことや、「年に二回位発行される、この『夜あけ』を、どうか「皆様自身の『夜あけ』として」そだててほしいと書いている。『夜あけ』はこの第一集で終わららしい。

なお単行本で出た『回想の河上肇』(世界評論社、1948年)については、杉原『思想家の書誌』(日外アソシエーツ、1990年)11~12ページ参照。

(10) 高野房太郎(1868—1904)

『資料室報』、特別号 No. 145、1968年10月。法政大学大原社会問題研究所資料室、高野房太郎生誕100年記念号。発行日1968年10月25日。33ページ、定価200円。

巻頭の「高野房太郎生誕百年記念号発行に当って」は、法政大学大原社会問題研究所となっているが、おそらく本号の発行人大島清の手になるものであろう。高野房太郎の略歴と、弟岩三郎がその伝記を作成すべく関係資料を保存していたことと、11月15日に房太郎の百年記念集会を開く計画のことをのべ、本誌には、房太郎の英文論説・通信の邦訳と解説、岩三郎が房太郎について書いた二編の文章および岩三郎の「職工組合に就て」(『東京経済雑誌』856号)を収録した、と書いている。

本誌はこの他に天涯茫茫生（横山源之助）が房太郎の遺骨が東京に到着し埋骨式が行われるに際して書いた「高野房太郎君を憶ふ」（『東洋銅鉄雑誌』創刊号，1904年6月）と大島清「労働組合の誕生——高野房太郎生誕百年に寄せて——」（『朝日新聞』1968年7月4日号）と、「高野房太郎関係文献目録」が載っている。追悼文としては岩三郎のが二篇と横山・大島の二篇と計四篇のみであるが、房太郎関係の文献としては貴重なものである。

(11) 榑田民蔵（1885—1934）

『資料室報』，No. 241，1978年1月，法政大学大原社会問題研究所資料室，特輯「榑田民蔵顕彰碑建立さる」，発行日1978年1月25日，24ページ，定価300円。

1977年11月1日，福島県いわき市小川中学校の校庭に，郷里の生んだ経済学者の顕彰碑が郷党有志者の手で建てられた。本誌はこれを記念する特輯号で，その内容はつぎの通りである。

榑田民蔵顕彰碑建立の記 大島清。榑田民蔵顕彰碑建設趣意書。榑田民蔵の生涯と業績 大内兵衛。榑田民蔵顕彰碑除幕式 榑田民蔵顕彰碑建設委員会。各新聞社報道（『朝日新聞』，『福島民友』，『福島民報』，『いわき民報』，『福島読売』，『広報いわき』，『6号線』）。いわき市に榑田民蔵記念建立さる 栗田健治（『社会主義』1977年12月号）。石になった榑田民蔵 大島清（『社会主義』1978年新年号）。父・榑田民蔵を語る 榑田克巳（『社会新報』1977年新年12月6日）。『福島民友』で，碑文を書いた草野心平は「生家は歩いて2分ほどの近いところにありますが，碑が完成してとてもうれしい」と喜びを語っている。なお9ページに「何事か為せ，為さざる可からず，生まれたる者はノ榑田民蔵」と彫られた（字は草野心平）碑と榑田フキ，克巳との写真がのっている。

ちなみに1957年6月に出た石城法友会機関誌『望峰』第2号は，「榑田民蔵先生追悼記念会講演会特集号」で大村哲也の編集・発行によるが，それにはつぎの諸氏の寄稿が掲載されている由であるが未見である。榑田ふき，大内兵衛，榑田政松，森戸辰男，久留間鮫造，日野利春，佐多忠隆。

(12) 田島錦治（1867—1934）

田島錦治は東京大学を卒業後ドイツへ留学，明治33年京都帝国大学教授となり，財政学を，後に経済原論や経済学史を講義した。定年後立命館大学学長となった。彼は京大在任中に立命館の外，関西大学や同志社大学や大阪高商の講師を兼ね，関西の経済学界の重鎮であった。単行本の追悼録は出ていないが，『経済論叢』（京大経済学会）の第39巻第2号（1934年8月）に年譜と業績目録，および経済学部長神戸正雄と門下生代表山本美越乃の弔辞のほか，つぎの人々の追憶文がのっている。

赤城君を憶ふ 織田萬, 田島先生を追憶する酒の話三つ 神戸正雄, 田島先生追憶断片録 山本美越乃, 恩師追憶余録 財部静治, 田島先生を憶ふ 河田嗣郎, 田島先生を憶ふ 本庄栄治郎, 田島錦治先生を憶ふ 小島昌太郎, 田島先生の思ひ出, 大国寿吉, ライン上りの想出 汐見三郎, 田島先生を追慕す 黒正巖, 田島先生の憶ひ出 田島順, 田島先生を憶ふ 石川興二, 田島先生を憶ふ 谷口吉彦。

13名のうち織田萬と田島順は法学者で京大教授, 織田は共にベルリンに留学した当時の逸話を, 田島は京大端艇部選手として世話になったことをのべる。田島がボートや武道に通じ, その発展に貢献したことについては大國の追憶文にくわしい。なお赤城というのは田島の雅号であって, 漢詩集『赤城詩録』がある。他の10人は京大出身でその経済学部教授(神戸のみ東大卒, 黒正は農学部教授)。

田島は東大の大学院で社会主義を研究テーマとし、『日本現時之社会問題——附近世社会主義論——』(明治30年)を著わしたが, 河上肇は本書を『社会主義評論』のなかで批判した。だが河上を戸田海市が推薦して京大に採用する話があったとき, 田島はこれに反対しなかった。1919年経済学部が創設されて以後, 定年まで田島は河上と隔年に経済原論と経済学史の講義を交替で担当した。田島の退職後間もなく河上も辞職するが, その後原論は九大から転じた高田保馬, 学史は石川興二が継承した。石川は田島を「武士道的儒学的人格をもって博く東西の経済学を研究しこれを日本に適用された秀れた経済学者であった」といい, 先生の経済原論の聴講をした初に当って, 先生は経済学を『経国済民』の学として規定されたが, この概念は先生の経済学を最も適切に定義するものと考へられる」と書いている³⁾。

(13) 福本和夫(1894—1983)

『運動史研究』(運動史研究会, 発行者石堂清倫, 発売元三一書房)第13号, 1984年2月)のp.114-175は, 「特集・福本和夫」としてつぎの三つの福本論を載せている。編集後記にいう, 「本号編集の締切り後, 昨春秋, 福本和夫氏が永眠された。堺利彦・山川均の再評価とともに, 福本和夫あるいは“福本イズム”についても, わが国共産主義運動の史的背景を考慮に入れつつ, やはり再検討すべきであろう。急遽特輯を試みたのも, そういう思いからである」。

伊藤晃「マルクス主義史における福本和夫」は, 運動史研究者が再検討しなければならない問題として, 「福本自身そのなかにあったところの運動の青春時代における知的発酵をどう評価すべきか。これをマルクス主義史上どう位置づけるべきか。福本主義という現象はたんなる偶然のできごとだったのか, それとも運動のなかになにかの根拠を有してい

たのか。福本主義の抑圧の結果、なにか日本の運動から失われたものはないか、など」をあげる。そして1924年9月、2年半の留学からかえってわが国の論壇に登場した福本が「積極的な問題として提起したのは君主制の問題であった。……一応福本時代において、日本共産党は『国体変革の目的を有することを知りながら』加入する性格のものとなった」といい、「第二インタナショナルにおける俗流化とコミンテルンにおける化石化とのあいだに、マルクス主義の自由で創造的な発展が可能かとみえた一時期（レーニン、ルクセンブルク、グラムシ、ルカーチらに表現される）に日本の社会主義運動がわずかでもふれたとすれば、それはまず福本和夫をつうじてだったのである」とのべている。

その福本がコミンテルンから排除され、日本の運動からも簡単にすてられてしまう経過をたどった後、伊藤はこう結ぶ。「コミンテルンの前にはルカーチさえ妥協し、コルシユは陸路を歩みそこねて反共主義に走ったのであった。福本を孤立させた力の大きさを想像するとき、私は彼に同情を覚えるのみである」。

八木紀一郎「福本和夫とフランクフルト社会研究所」は、1923年フランクフルトに設立された Institut für Sozialforschung が「社会研究所」と名づけられたのは福本の1922年のアドヴァイスによるというエピソードについて、この研究所の創設者フェーリクス・ヴァイルの講演（1973年7月）や八木が1974年秋、福本に質問して得た解答などによって説明し、最後にこの研究所を中心とする知識人を結集した社会の総体認識としての「社会研究」という理念についてのべている。

石見尚「福本和夫と日本ルネッサンス史論」は、福本の『日本ルネッサンス史論』（1967年、東西書房、A5版853ページ）は——それは彼が釧路の獄中で着想し、1941年出獄後脱稿した第1次稿から第4次稿が1964年に完成するまで28年かかったライフワークである——「アジア諸国の中で日本だけが19世紀の後半に何故に先がけて近代国家への道を歩み出したのか、そしてそれはその後の社会運動の歩みにどのような発展と同時に歪みをつくりだしていったのかを解く鍵を提供している」と書いている。

なお福本の1983年6月の写真と略年譜（著作年表を含む）は、病没の直前に出た『福本和夫研究』第5集（1983年8月24日）にのっている。

福本については大正末—昭和初期の「福本イズム」がよく知られているが、戦後の彼の活動についてはあまり知られていない。その意味でこの文献とか、かつて紹介した『福本和夫研究』（杉原『思想家の書誌』、1990年、日外アソシエーツ、184—5ページ）が参考になる。なお福本和夫文庫が藤沢市文書館に1975年設立された。

（14）行沢健三（1924—1980）

『如意』第8・9合併号、発行如意倶楽部(交野市松塚44-7 高橋正立方)、編集如意編集委員会(三鷹市井口177、武蔵ハイム227、辰見公男方)、発行日1980年7月10日、に故人の次の追悼文二篇がのっている(28-39ページ)。また「事務局より」の中に「21年次ゼミ参加の行沢健三氏(京都大学経済研究所所長)が1980年2月8日、12年の闘病の後お亡くなりになりました」という記事と遺影がかかげられている。『如意』は出口ゼミOBの機関誌である。

田中真晴「研究者としての行沢健三さん」

高校や大学で1年後輩の田中は、出口ゼミで経済学の古典と一緒に学んだ行沢——当時J. S. ミルの『経済学原理』や『論理学体系』にとりこんでいた——からその頃「清潔な初心・知的誠実という、学問におけるもっとも大切なもの」を持っていたこと、行沢が関西学院にうつって国際経済論を専攻してからも、イギリス経済学史の研究業績が生まれるが、それには「経験主義的であり、分析的で平明な合理的思考」という「持味」があることをのべている。また、行沢の国際経済論での業績が、(1)彼の学位論文『国際経済学序説』(1957年)を中心とする理論的研究、(2)『労働生産性の国際比較』(1976年、日経図書文化賞受賞)を中心とするもので、「リカード・マルクスを環流する労働中心の理論を、悟性的・実証的な科学の立場において、つよく生かそうとした」もの、(3)「日本を中心とする国際経済の現状分析と展望、国際通貨としての円に関する時事論説」と「日本の貿易統計の吟味、組み替え」という三系列があることを指摘している。

梅沢直樹「行沢先生を偲んで」

これは、行沢が日米工業の労働生産性比較の計算作業を1972-75年にアルバイトで手伝っていた出口ゼミの後輩である筆者の経験から「この地味な研究の背後で重ねられてきた先生のご苦心の二、三を紹介」したもので、調査の対象期間が十数年にわたることから多くの困難を行沢がいかに克服していったかが具体的にのべられるとともに、行沢が持病と闘いつつとりこんだこの仕事の中で後輩の梅沢に対してしめしたあたたかい「心遣い」についても語っている。

なお本誌の「近況・雑感」に行沢のつぎの一文がのっている。

「この所、年中行事(というより、正確には2年に一度の割合で)のように、持病の淋巴腺治療で京大病院に入院していますが、今年も5月から入っています。経過は良く、8月初め頃には退院の見込みです。

実は、昨年7月より京大経済研究所の所長(任期2年)に就任していますが、入院中は所長事務代理の人にお任せし、治療専一にしております。経済研究所は昭和37年に発足

し、現在八部門（学部の講座に当る）となり、日本経済を中心とする実証研究に特色を出すべく努力しています」。

行沢はこの文章をかいた1979年7月の七カ月後に、50歳代の半ばにして他界したのだった。

-
- 3) 明治39年に刊行した『社会主義評論』の第三信で田島錦治の『日本現時之社会問題 附り近世社会主義論』を論難している河上は、『自叙伝』の中で、田島のことをつぎのようにのべている。「私がまだ大学生であった頃、田島錦治氏の『最近経済論』といふ本が出たが、それは当時好評を博したもので、広く学生層の間に流布された。この本の附録には、マルクスの学説の大綱が紹介されてあった。恐らく日本では、さうしたものの嚆矢であらう。しかしこの人は、早くマルクスに見切りをつけ、私が京都帝大に奉職してゐた頃は、大先輩の同僚として、いつもマルクス排斥に躍起となつてゐた」(全集、続5、108—9ページ)。
- 4) 私はこれまで京都(帝国)大学経済学部の教授だったつぎの13名(ただし助教授もしくは京大の他の部署の教授だった3名をふくむ)の追悼文集を紹介した。田島錦治、戸田海市、河上肇、河田嗣郎、高田保馬、汐見三郎、谷口吉彦、柴田敬、黒正巖(農学部)、白杉庄一郎(助教授)、松井清、大橋隆憲、行沢健三(経済研究所)。